In April 2022, Osaka City University and Osaka Prefecture University marge to Osaka Metropolitan University

Title	事物と装置 ： 構築主義的社会経済学の宣揚
Author	須田 文明
Citation	経済学雑誌, 109 巻 1 号, p.19-36.
Issue Date	2008-06
ISSN	0451-6281
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	Publisher
Publisher	大阪市立大学経済学会
Description	<小特集>コンヴァンシオン理論特集
DOI	

Placed on: Osaka City University

Osaka Metropolitan University

小特集：コンヴァンシオン理論特集

事　物　と　装　置

――構築主義的社会経済学の宣揚――

須　田　文　明

1. はじめに

市場主義的な経済運営が経済格差を「社会問題」化させている現在，こうした経済政策をもたらした（ウルトラ）ネオ・クラシック経済学への様々な潮流による批判が噴出している。経済学理論が市場経済のグローバル化を遂行し（Callon, 2006）[1]，その結果として様々な問題を発生させ，それが（とりわけメディアを通じて）社会問題として構築されてきた様は，それ自体，興味深い知識社会学的課題をなしていよう。

我々は，コンヴァンシオン経済学というフランス出自の経済理論に依りながら，経済学における認知主義的転換と解釈学的転換とに注目してきた（須田 2004）。本稿では，コンヴァンシオン経済学のみならず，アクターネットワーク理論や「新しい市場社会学」（Callon や Cochoy, Dubuisson-Quellier など）等に依拠することで，「構築主義的」社会経済学を打ち立てるための大まかな見取り図を描きたい。

経済学における認知主義的なアプローチは，サイモンらにより先鞭をつけられたとされ，近年では，トヴェルスキーやカーネマンらの認知心理学を取り入れた「行動経済学」が隆盛を見せている。我々は，こうした認知主義的アプローチを別様に探求する端緒として，シェリングの「焦点（フォーカル・ポイント）」概念に注目したい。これこそ「純粋市場論理の非決定性」（A. オルレアン）にもかかわらず，市場取引が成立する鍵を提供してくれるからである。焦点としての「市場的媒介物」が需要と供給をつなぐ目印となって，各経済アクターの期待と行動を調整することができるのである。

本稿が構築主義的社会経済学の旗を掲げるのは，こうした「焦点」というブラックボックスを開け，焦点の構築過程の研究を課題とするからである。その際，我々は，需要と供給，消費

1）新古典派経済学理論はフォーマットとして機能することで，グローバルな市場経済を遂行するのと対称的かつ相補的に，経済学者＝エコノミストという職業の規格化をもたらした。それは，マクロ経済学とミクロ経済学，計量経済学という標準から構成された大学の経済学コースを国際レベルで普及させることで達成された。こうしたコースを修了し，標準的経済学ツールを装備した各種エコノミスト（その多くは米国への留学経験を持つ）の言説が共通表象をなし，目印を提供することになった。Lebaron（2003）および Lordon（2007）を参照。

者と製品とを突き合わせる媒介的な技術的事物（格付け装置＝デバイス）に注目する[2)]。こうした我々のアプローチは，市場主義への声高な原理主義的批判を超えて，多様な価値観を組み込んだ製品と消費者との出会いの装置をデザインすることで，市場そのものを変容させるという，具体的な経済政策ないし制度設計を構想することを可能とさせよう。

本稿の叙述は以下の通りである。続く2章では，純粋市場論理の下では不可能な製品と消費者との，つまり需要と供給との突き合わせが，目印ないし媒介装置を通じて可能となることを論じる。その際，製品，総じて事物を格付けするための「装置＝デバイス」を鍵概念として検討する。ベッシーやシャトーレイノによれば，こうした装置が事物の身体的知覚を共通表象と関連づけてカテゴリ化する際の試験を実施するのである。こうして得られた格付を目印として，事物が市場で流通することになる。第3章で明らかにされるのは，事物の多様な捕捉様式に応じて差異化されたレジームを通して，事物が相互行為をコーディネートすることである。この場合，俎上に上るのは，L. テヴノらによるフランス流の認知主義的なプラグマティズム社会学である。続く第4章では，このような理論設定から明らかになった媒介装置が事物を特徴付け，格付けするのと対称的に，消費者の「肖像」figures を客観化し，定義することで，いかにして市場を構築するかを明らかにする。またこうした事物への消費者の接続を安定化させ，消費者を捕捉するために，様々な装置が案出されているのである。こうして本稿を通じて，フランスにおける構築主義的な市場研究の一端が明らかになろう。

2. 装置とミクロ・マクロ・ループ

(1) 純粋市場論理の不完全性と媒介装置

経済理論は，事物ないし製品とその使用者との突き合わせの問題を，市場での需給関係へと解消しようとする。市場関係においては，製品の購入は，「すでにそこにある」供給（「製品バスケット」における「諸特徴のバスケット」）と，完全に同定可能な所与の選好を持った需要との間での曖昧さなき出会いから生じるとされる（Barrey, 2006）。財や買い手の原子論的特徴付けや市場の透明性という仮説のために，事物や人の種別的特徴を検討する必要はない。商品の一般的性格へと還元されることで，事物は，（その唯一の適切な特徴を反映するとされる）価格の変動についてのみ考慮されることになる。他方，買い手は，財のために支払っても良い価格へと要約される（Dubuisson, Hennion, 1996）。

ところが中古車市場でのアカロフの研究が示すように，売り手と買い手との間での，事物

2) 事物への注目という，我々のこうしたアプローチは，アクター間の既存の社会的ネットワークへと市場を埋め込むグラノベッター流の経済社会学とは異なる。また社会学における様々な構築主義的アプローチ（社会問題社会学やシンボリック相互行為論など）とも異なる。こうしたアプローチは言説による対象構築ないしカテゴリ化を強調するのに対し，我々のそれは，事物とその認知を強調するのである。

(製品) の特性に関する情報の非対称性は，販売される事物の品質の低落をもたらし得るし，価格低下の蓄積的過程を通じて市場を消滅させることになる。こうした一般的不信の過程を回避するために，アカロフは製品の品質を認証する媒介物に依拠することが必要であると主張する。こうした観点から，事物の特性（品質）を格付けする機関やアクター（例えばセリ人），総じて媒介物の作業を分析することができるのであり，こうした媒介物がまがい物の事物を除去するのである。かくして，事物を特徴付ける作業は真正化 authentification の契機として現れる。媒介物は専門知の能力を遂行するのであり，これは市場のエージェントの能力についての単純化されたイメージ（価格を叫ぶだけのセリ人）とは全く異なったコンピテンスなのである（Bessy, 2003)。こうして Cochoy (1999) が装備 equipements という概念によって示すように，広告やパッケージといった供給デバイスが消費者に提示する様々な認知的手段に依拠して，消費者は選択を実施しているのである。こうした認知的手段が，本稿で検討する市場的媒介物ないし格付け装置をなしている。

需要と供給の突き合わせを可能とし，かくして市場そのものを構築するための目印を「装置＝デバイス dispositifs」として考察するためには，起源を異にするいくつかの社会理論を検討しなければならない。ここではフランスの認知主義的な社会理論の一端を取り上げることにし，まずは，我々のアプローチの鍵概念である「装置」概念の変遷を見てみよう。

(2) 「装置」概念の変遷：フーコーからアクターネットワーク理論 ANT へ

「装置＝デバイス dispositif」概念は，Beuscart ら (Beuscart, Peerbaye, 2006) が指摘するように，「特殊フランス的な知的空間に根付いた概念」である。英訳では，そのまま dispositif ないし dispositive と表記されたり，場合によっては apparatus, device, arrangement, socio-technical system, setup, あるいは単に mechanism と訳される。70年代に，フーコーを嚆矢とするその社会学的使用は知や権力，主体を立ち上げる種別的歴史構成体の「ネットワーク」として「装置」概念を導入し，パノプチコンのような「監視装置」や「セクシュアリティの装置」といった枠組みとして確立されることになる。つまりそこでは，「言説や制度，建築，規則による決定，法律，行政措置，科学的言明，哲学的，道徳的主張を含む，決定的にヘテロな全体」(Foucault, 1977, p. 299) の，様々な要素の間に辿ることのできるネットワークとして装置が考察されているのである。

その後，この概念はカロンやラトゥールといった「イノベーション社会学センター CSI」の「翻訳の社会学」の研究者たちに引き継がれることになったが，それはこの概念に新たな展開をもたらさずにはおかなかった。例えばラトゥールもフーコーの『監視と処罰』に言及して，社会的安定性を理解するためには，ノンヒューマンな事物やミクロレベルでのテクノロジー資源を考慮しなければならないとする。「フーコーは，様々なテクノロジーを通じて普及するミクロ権力が，規律付け，一列化させる事態を明らかにすることで，強者の権力という概念を解

消することができた。[ラトゥールらのアプローチは] マシーンや自然科学において採用されている多様な技術へとフーコーの概念を拡張することに他ならない」(Latour, 1986, p. 279) とする。科学技術社会論 STS は「システム」や「構造」といったホーリズムのアポリアを克服するためにアクター「ネットワーク」というタームを案出したのである。ANT の創始者たちは,「翻訳」や「リゾーム」という観点からセールやドゥルーズの決定的影響を認めるが, フーコーからの影響についてはそれほど自覚していないようである (Beuscart, Peerbaye, 2006)。

装置=デバイスはヒューマンとノンヒューマンとのこうした合成 assemblage を指し示すのに最適なタームである。つまりそれは事物に挿入された「アクションプログラム」(Latour, 1996) もしくは「スクリプト」(Akrich, 1992) を記述することであり, また事物に「媒介者」としての地位を与えることである。デバイスなしに翻訳はなく, 言明や技術的アレンジメント, 肉体化されたコンピテンスといったヘテロな要素の合成 (これが「翻訳チェーン」をなす) なしに, 翻訳はない。翻訳チェーンのヘテロで, 技術的, 定型的, 標準的な性格のために, 技術科学的ネットワークは権力関係を産出し, 維持することができる (Callon, 1991)。なお, カロンやラトゥールらのアクターネットワーク理論 ANT の文脈では, 仏語の dispositif は常に device として英訳される。

その後, 90年代に至ると, 装置=デバイス概念が社会科学の一般的タームとして普及するようになり, 社会的相互作用 (相互行為) やコーディネーションにおける事物の役割が注目されるようになると (Beuscart らによると, Conein, Dodier, Thevenot, 1993の Raisons pratiques 誌特集号がその転換点をなしていたという), この概念をめぐって新たな問題設定が見られるようになった。例えば Boltanski と Thévenot は, アクターたちが自らの期待や行動を調整するための行為や事物の格付のテストにおいて, アクターに対して判断を装備させる装置=デバイスの解明を課題とした。こうしたフランス社会科学の認知主義的, プラグマティズム的転換は, アメリカの認知科学が分散認知における事物による装備を強調していたことと重なる (Thévenot らの特集号でも, Norman, Hutchins の仏語訳が掲載されている)。

さらに近年では「新しい市場社会学」(Callon, Cochoy, Dubuisson-Quellier など) が市場的相互行為における事物や技術的媒介物の役割を主題とするにいたり, こうした装置=デバイスをめぐる議論は新しい展開を見せることになった。つまりこれらのデバイスはすでに確立したアクター間でコーディネーションを遂行するだけでなく, アクターと事物との対称的な相互構築を可能とし, 製品と消費者との出会い, ひいては市場の構築を可能とさせるのである。すなわち同定可能な選好を持った消費者やクライアントが, すでにそこにいるのではなく, 彼等は事物と同様, デバイスにより構築されるのである。本稿の議論も, こうした装置概念の展開の延長線上に位置づけられる。

(1) 「手がかり」——ミクロとマクロを媒介する装置——

1) 格付のための試験装置

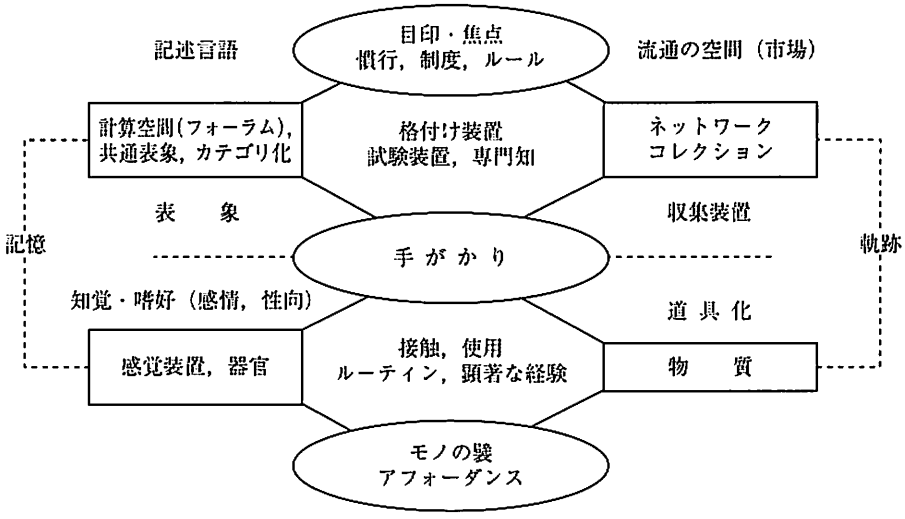
上述のように，ANT 及び「新しい市場社会学」によるデバイス概念の導入は，ノンヒューマンな事物の統合により，ミクロな行為論とマクロな社会構造論とを接合する社会理論の新たな展望を切り開いてきた。一般的に社会科学は，客観的なことと社会的なこととを右から左へと水平的に引き裂いているために，つまり社会科学はモノのための場所を持たないために，上から下へと，構造と行為との間で垂直的に引き裂かれることになる（Latour, 1994. p. 598)。こうして，モノという人工物の忘却が，別の人工物（社会という幻想）を作り出し，こうした幻想としての社会は，社会的なことのみによって，この社会を維持しなければならなくなったのである。むしろ社会とは裸の人間の紐帯によってではなく，石と砂とセメントから成立しているのである。こうして事物をフォローしていくならば，もはやミクロからマクロに至る断絶に陥ることはない。相互行為と社会構造との断絶を，ヒューマンとノンヒューマンという二つのアクターの間での特性の交換による合成 assemblage によって打ち破ることができるのである。

こうした展望と並行して，フランスでは認知科学とプラグマティズム社会学から多くの着想を引き出して，Bessy や Chateauraynaud による独自な議論が，やはりミクロとマクロを繋ぐループを構想している。彼らの議論も，装置＝デバイス，とりわけ事物の格付けにかかる試験のデバイスを重視し，そのさい彼等が依拠するのが「手がかり prise」概念なのである。これこそまさに，モノの「襞」（彼らがドゥルーズのバロック論から引き継いだ概念）と身体との直接的接触から，共通表象や制度といったマクロ的次元へと至る鍵概念だからである。

こうして Bessy と Chateauraynaud (1995) は，「知覚の社会学」を提案する。すなわち「真の専門家のみがアクセスできるかのような，明確で顕著な知覚のレベルと，社会的に可変的な表象や解釈のレベルとを対立させるべきなのであろうか？　知覚が『客観的』で，解釈は『主観的』なのであろうか？　感覚は経験の裁量に委ねられており，解釈は安定した慣行 convention に基づいているというのであろうか？　あるいは，道具だけが客観的であり（というのも，物理的世界と密接な関係にあるから)，知覚や表象は社会的に可変的で，裁量的であるのだろうか？しかし，道具もまた社会的な構築物なのではないだろうか」(1995, p. 234)。彼等は「手がかり prises」概念に依拠して，こうした疑問に答えようとする。この概念はもちろん，メルロー＝ポンティの「世界への手がかりシステム」(Merleau-Ponty 1989, p. 53) から採用されており，手がかりというタームは世界に対してアクターが自らを調整する際の目印を示すとされる。彼等は，メルロー＝ポンティを，J. ギブソンの知覚の生態学と連結させるのである。こうしてオーギュスタン・ベルクなどはギブソンの「アフォーダンス」を「手がかり」と仏訳することになる。

Bessy 及び Chateauraynaud によれば，手かがりとは，アクターたちの合意に基づいた慣行

図　事物と共通表象を媒介する手がかり



出典：Bessy and Chateauraynaud, 1995, p. 243（ただし筆者加工）.

的な目印と，物質の「襞」との間の突き合わせから登場し，つまり単に感覚装置＝器官や知覚，身体状態のみならず，道具も媒介させるじかの接触から登場するのである。要するに一方での共通表象と，他方での事物の「襞」とを結びつけるものとして，「手がかり」を考えるのである。こうした手がかりは以下のような4つの形態を統合している。すなわち ① 言語によるカテゴリ化や格付けの装置，② 事物によりトレースされるネットワーク，③ 感覚的経験，④ 物質の道具的試験である。こうして，ある手がかりが成功するのは，共通表象と身体感覚，道具による測定，これらが調整されているときなのである。こうした「手がかり」を Bessy と Chateauraynaud は次のように図示しているので（1995, p. 243），この図をもとに説明しておこう。ここでは，様々な科学技術とその専門知について，専門家やアクターたちがその判断を行う際に依拠する手がかりを例にして，論じることにしよう（Chateauraynaud, 2004a, b も参照）。

① 共通表象と事物のネットワーク

格付けの試験装置は，まずはコード化やカテゴリ化，フレーミングのように，言語によって事物を客観化ないし定義する表象空間にかかわる。例えば分類規則やコード規則を掌握している専門家は，他のパートナーたちと記述言語を共有している。ここでは事物は述語の働きと関連づけられ，特異性を内生化させることができる記述上の慣行に従うことで，当事者たちは，あらゆる事物を記述することができる。こうして，あらゆる専門知のプロセスは，相対的に安定した記述言語に基づいている。なお一方で，記述言語の内容や格付けをめぐる合意は物質的試験や感覚的経験にも依存しているのであり，他方で格付けは，事物の物理的ないし感覚的試験の結果を，共通表象の中に統合するのである。

ところで，こうした格付の試験装置は言語によるカテゴリ化だけに由来するものではない。この試験によって，専門家は当該の事物をネットワークやコレクション，博物館といった集合体と照合させて，事物の起源を再追跡したりすることで，事物の真正さを試験することができる。この場合，事物は多くのアクターや資源（専門家の必要とする知識を分散的に貯蔵している）を関与させる。アクターネットワーク理論におけるのと同様，こうしたネットワークは単に人々のみから形成されるわけではなく，証言の連鎖は，事物に関わるインスクリプションやトレース，装置や制度にまで拡大される。なおすべてのネットワークが透明なわけではなく，同一の形態のトレースや記憶を保持しているわけではないので，専門知は，チェーンの遡及や系譜学に還元することはできない。さらに起源へのアクセスは途中でとぎれることもある。この場合，別の形態の試験による補強のみが，起源の忘却を補完することができる。すなわち事物の記述言語を精緻化すること，真実らしい表象や事物と比較考量すること，道具によってその物質的特徴を精査すること，感覚的能力を動員することによってである。

こうした格付のテストを経ることによって，事物はその特性を客観化され，真正さを証明されることで，例えば市場のような空間で流通することになり，アカロフのレモンのようなアポリアが回避されることになる。

② 道具と感覚

実験室などでは事物は道具によりテストされ，こうした物質的試験は身体的経験を超えている。この場合，感覚的世界への準拠は，もはや専門家の身体によって直接的になされるのではなく，道具を媒介にするのである。物質は道具によって表明され，今度は道具の忠実性が試験されることになる。しかし，いかに精密な道具も論争を閉じることはできないし，疑いを消去することもできない。技術的媒介の連鎖は，対象物の記述において矛盾を生み出し，対立するテーゼを同時に補強してしまう。物質的試験が真正さを証明できるのは，この証明がモノの襞と身体的知覚，顕著な経験とを連結させることができる限りのことなのである。

他方で，身体による事物の知覚という試験は証明のヒエラルキーにおいて低く見られており，上述の道具によるテストが高い価値を与えられている。感覚の関与は合意を確立するための十分な安定性を持たないかもしれない。しかし事物は，専門知を確立するために供される道具に対して，不十分にしか手がかりを与えない。多くの道具は感覚的試験を排除せず，むしろこの感覚的試験を再定義し，感覚的定義は証明様式として機能し続けるのである。例えば，レントゲン写真の良い解釈において，個人的経験に基づく洞察力が機能し続けるのである。つまり事物や真正性，その判断の質に直接的に関与させられるのが，主体の顕著な経験なのである。実験室のエスノグラフィーが示しているように，最先端の科学分野においてさえ，萌芽的知識は人や事物に粘着しているのであり（須田 2008），このような知識の移転も対面的状況においてなされるのである。こうして感覚的試験は「主観的」だとして排除されるべきではない。触覚のような感覚的試験は，相互性に基づいている。つまり私が事物にふれるとき，私は事物から

生じる感覚を私自身の状態として受け取るのであり，客観的世界の特性が身体に刻印されるemprise のである。ここでは身体は「センサー」なのである。センサーとしての身体の特異性を示すために，ここでは，洪水警戒センサーを例に引こう。この物理的センサーは，河川の水位が一定以上に上がると洪水警報サイレンを鳴らすという仕組みをなしている。このセンサーは，人間があらかじめフォーマット化しておいた警告を発するに過ぎない。これにたいし，身体センサーは，状況の異常を非意図的に感知することができるのである。

③ 共通の計算空間（ハイブリッド・フォーラム）での熟議

アクターたちは，上述のような様々な試験に基づいて自らの議論を正当化することができよう。こうしたアクターたちの間での議論や論争が可能となるのは，登場人物たちが，「共通の計算空間」の中で集団的目印を精緻化しようとする場合だけである。討議がなされるためには，議論を通約可能にさせる装置がなければならないのであり，これなしには，アクターたちの純粋な力の試験（暴力）が課せられることになる。こうした共通空間は，プラグマティックな考え方からすれば，次のような要素からなる。すなわち事物とその配置たる具体的状況，試験の装置，評価判断原則である。こうした計算空間は，既存の議論枠組みを踏襲することもあれば，必要に応じて，新しい事物が投じられたりすることで，新しいアレンジメントを作り出すこともある。近年では，GMO や狂牛病，ナノテクノロジーといった新しい事物の登場と，トレーサビリティやコンセンサス会議といった装置，予防原則といった判断原則との間でのオリジナルな接合形態が構築され，「前例」となって，その後の公共的な議論にとっての共通の認知的目印をなしている事例が散見される。

こうした同一の計算空間の中で，全く異なった論理に属する諸実体が交渉され，統合されるようなことが起こる。例えば地球温暖化をめぐる討議では発電量（メガワット）と，犠牲にされる森林面積（ヘクタール），環境への影響測定，現地住民の雇用数，これらが一括して，同一の計算空間の中で扱われるのである。またこうした計算空間は新たな事物を流通させるために市場を構築する際の「ハイブリッド・フォーラム」の場でもあり，このフォーラムが事物を格付けし，客観化させるのである。例えば遺伝子組み換え食品やナノテク製品の市場を構築する場合を考えてみればよい。このフォーラムにはエコノミストや行政官，科学専門家，企業家，国際機関，法律家，市民団体が，これらの事物についてのそれぞれの知見や経験を交渉するのである。ここでは市場の構築が，メタレベルで非市場的に交渉される。人や事物に粘着した萌芽的知識が，市場構築以前に，こうしたフォーラムで交渉されるのである（須田 2008）。

2) 感覚的自明性と媒介的装置

上述のように，事物についてのある命題の妥当性や真正さは，感覚的自明性 tangibilité により保証される。こうした自明性は，感覚的世界で働く知覚能力と，最新の設備を備えた道具的証明方法との連続性を示している。こうして集合的表象と感覚的世界における知覚との間で，人々にとって共通の手がかりが精緻化され，真正さについての合意を支えるのである

(Chateauraynaud, 2004b, pp. 168-170)。なお，こうした自明性を産出するのは身体を通じた知覚的作業だけに限られない。顕著な出来事（米国における 9.11 のような）やスキャンダル，経験により産出されるショックがある。こうしたショックが起こっただけで，大多数のアクターにその痕跡を刻印し，今後起こる一連の試験において基準となるような前例を作り出すのである。つまり，あらがいがたい事実と経験が新しいエヴィデンスをなし，共通感覚を変容させることにより，事物をめぐる論争が終結するのである。アクターは，自らの身体的知覚や特異な経験と，共通表象との間を連結させようとしており，とりわけ上述のような共通の計算空間が事物のための試験装置を精緻化し，これが個人的知覚と共通表象を繋ぐ媒介となる。

こうして，事物についての命題をめぐる論争は，それが「触知への帰還 retour tangible」を促す限りで，つまり世界への手がかりの修正をもたらす限りで，創造的な機能を持っているのであり，論争は共通感覚の修正作業を可視化させ，共通の計算空間を集合的に産出するのである。また上述の「手がかり」がミクロ・マクロ・ループの鍵となる一環をなすのは，手がかりが，こうした共通の計算空間の中での集団学習を可能とし，新しい目印の創出を可能とする共通の手がかりとなることができるからである。学習効果にとって不可欠なこうした格付け装置は，集合的表象ないし共通の目印と，物質の襞への身体感覚との間での往復運動を可能とする媒介的装置なのである。こうした装置の中に，とりわけ事物を市場で流通させるための市場的媒介装置がある（4 章で詳述）。専門家やアクターが，すでに構築されている流通空間ないし市場へと事物を流通させるのか，それとも新たな流通空間を構築するのかは，彼がこの事物をどのように判断するかによる。ここで重要なのが，事物を捉える専門家の「コツ」なのであり，事物の「手がかり」を明らかにさせること，つまり物質的特徴の知覚から一般化可能な表象へと移行する技芸なのである。こうして彼は，事物の襞との感覚的接触によって，共通の計算空間の中での議論や集団学習を経て，共通知識を豊富にさせることができる。「手がかり」こそが，物質性から言語によるカテゴリ化への移行（逆も真なり）を具体化するのである。

感覚的能力のコミットメントにおいて専門家は事物によって導かれるままなのでもなければ，既存の共通表象や目印を受け容れるだけでもない。こうした感覚的能力のコミットメントと，既存の安定化した表象や目印の動員との間での，評価活動の最中での行き来が，「わかることのレジーム regime de comprehension」(Bessy, 2003) と呼ばれるものの主要な特徴の一つである。こうして必ずしもすべての手がかりがアプリオリに所与として与えられているわけではなく，専門知を実践する中で徐々に構成されるのである。それは，事物により，またこの事物が促す感覚により導かれることで，既存の計算空間から脱却し，評価の新しい目印を獲得するのである。

こうした事態はまさしく学習のダイナミズムを示しており，それは Bessy (2003) が示すように，サイモンの分析に見られる。サイモンの分析のオリジナリティは，新しい目印の探求及びその創出過程の中に，直感と感情の役割を導入したことである。事物の特徴を瞬時に同定

する能力が，専門家の基礎的手法の一つとしての直感の源泉をなしているのである。サイモンが教育における感情の役割について述べているように（感情のない認知 cold cognition と感情により支えられる認知 hot cognition），感情は注意を動員させることで，感覚的能力を注意深くコミットさせ，専門家に対して，（彼にとってあまりなじみのない）事物へと彼の専門知を移動させることを可能とさせ，ある特定領域へと専門化し，固着した彼のコンピテンスを緩和させ，新たな手がかりを獲得させるのである。上述の図で感情が図示されていたのも，このような意味においてであり，感情は事物の知覚において重要な影響力を有していよう。

3. 事物によるコーディネーション

(1) 事物の行為生成能力

事物を組み込んだ社会理論ではすでに我が国においてもアクターネットワーク理論 ANT が広範に普及している現在，以下では，ボルタンスキとテヴノ以降のフランス流の「プラグマティズム」社会学に主として依拠して議論を進めることにしよう（Nachi, 2007）。こうした潮流は，アクターが事物を捉える際に動員される複数のコミットメントレジーム régimes d'engagement を解明し，事物への関係及び事物の客観性に基づいたコーディネーション様式を明らかにすることになったのである。

事物は，二つの様式に従って行為を生成する能力を持つ（以下の議論は，Barbier et Trepos (2007) による）。つまり一方では，事物は，自らの中にプログラムとして記載されている方向へと行為を導き，行為や期待を安定化させる。他方で事物は，行為遂行の過去の枠組みと断絶し，そこに非決定性をもたらすのである。最初の事物の能力が示すのは，相互行為や期待は，事物に囲まれた物理環境によって枠組みづけられ，フレームされることができる，という考えである。つまりこれらの事物が，可能な行動の領域 registre をあらかじめ記載しており，この領域が判断や行為遂行のタイプを特定する。例えばセンサーや計測装置を配備した環境では，パフォーマンス（工業的世界に特徴的な価値）に基づいて判断がなされる。一般的に「外在的実体が，柔軟なガイダンスを通じて，特定のコーディネーション形態へと人々を方向付ける」(Dodier, 1993, p. 14)。

こうした事物による相互行為の「ガイダンス」は，ボルタンスキが「的確さにおける平穏 la paix en justesse」と呼ぶ事態に見られる。それは，事物が，個人的もしくは集合的行為の指揮者であるような行為レジームである。「(これらの事物は) それが我々に押しつける制約によって，デュルケームが，社会的規範に認めた役割を演じている」(Boltanski, 1990, p. 141)。我々の行為を制約すると同時に安定化させるこうした事物は，他の場所で，別の時期に始められた行為の物質的延長でもあり得る。このように，事物は空間的にも，時間的にも行為能力を拡大させ，延長させる。

他方で，事物のもう一つの能力は，単に自らに挿入されていたプログラムをアクターに遂行

させるだけには限られない。ヒューマンとノンヒューマンとの結合は新たに不確実性を生み出す。行動に動員される事物は単なる「メッセンジャーボーイ」なのではなく，しばしば「積極的な媒介物」なのである。もちろんこうした事物の特性を引き出すのは，上述のシャトーレイノの議論で見てきたような，事物と身体とのじかの接触である。しかし他方でそれは，M. ド・セルトーの「戦略」と「戦術」との区別と重なる概念である。つまりアクターは，あらかじめ処方された事物の使用法（上からヒエラルキー的に下ろされる戦略）を回避して，自らの想像力と即興という戦術的イニシアチブを発揮することで，事物とその使用法をブリコラージュ的に変容させるのである。

(2) 事物の客観性感覚と行為：L. テヴノの議論から

上述のように，ヒューマン・アクターは事物の持つ客観性に単に反応して，自らの相互行為を遂行しているわけではない。Barbier et Trepos (2007) にしたがって，事物とヒューマン・アクターとの接触が切り開く相互行為について検討してみよう。

ボルタンスキたちは「ノーマルなコンピテンスのある人」は「正義についてのノーマルな感覚」を有していると想定している。Barbier たちはこうした「アクターの基礎的コンピテンス」(Dodier, 1993) に，さらに「客観性についてのノーマルな感覚」を付け加える。こうした客観性感覚は，行為のプラグマティックな制約に応じて，複数のやり方で，事物を把握することを可能とさせるというのである。テヴノ (Thévenot, 1993) は行動の継起的連鎖の基本的レベルで見られる「人とモノとの間でのやりとり figure de commerce」に着目し，こうした事物の把握の複数の形態を三つのコミットメント・レジームに分類する。このレジームに応じて，事物を把握し，妥当な情報を収集する様式が差異化され，事物を通じた相互行為のコーディネーション様式が三つに区分されることになる。アクターは，そのノーマルな客観性感覚によって，こうした三つのコミットメント・レジームの間を状況に応じて移動することができる。

1) 機能のレジーム（「通常の行為」のレジーム）

通常の行為のレジーム，つまりプランに基づいた行為において，事物は「忠実な従僕」として現れる。事物は効率性によって評価される一連の行為において，プラン履行手段を提供するのである。事物は整備されたメソッドであり，それに期待されたことを履行するマシーンであり，機能性によって保証され，使用者から独立した効率性を有している。他方，アクターは意識を持った主体とされ，「責任」を付与される。

プランに基づいた行動について，Thévenot (2006, pp. 121-122) は以下のように述べる。つまりプランの効率性は，このプランを実施するために組織化されている事物に由来し，こうした事物はプラン作成者の能力を遂行する。プランに基づいた行動は，その効率性を，プラン作成者の思考の外側にある事物から引き出すのであり，こうした事物が人間にとって外在的な空間へとプランを延長させることができるのである。プランに基づいた行動において，事物は

人間の認知活動を外在的に支える「認知的人工物」(Norman, 1993) なのである。このレジームは，後述のデザイン実践と関連づけられよう。

2) 親密性のレジーム

このレジームでは，事物の使用や事物との「慣用的接触」(Thévenot) をなしている特別な「襞」を通じて，事物が身体によって捉えられる。身体の自然と化した「熟練」が確固たる手がかりを提供し，感覚的に適切な行為が，頭で考えられる以前のレベルで展開する。このとき手がかりは，コンピテンスの分散に依拠している。つまり，行為を方向付けているコンピテンスは，人にか，それとも親密な物質環境にか，どちらかに由来すると考えることが困難で，これらの二つが不可分の全体をなしている。こうして階級や宗教への帰属という伝統的マトリクスとならんで，物質性が「主体化のマトリクス」をなす。

テヴノは，正当化のレジームを扱ったボルタンスキとの共著『正当化の理論』に引き続いて，新しいコミットメント・レジームについて探求した。こうして彼は，人々が親密な環境の中にいかにコミットするのかについて検討することになったのである。『正当化の理論』のテーマは，諍いと，集団的コンヴァンシオンによる調整であった。しかし，多くの状況は「一般性への上昇」を通じたコンフリクト解決を必要としないし，親密で近接な関係は，こうしたパブリック化を要請しない。こうした関係は，例えば，(集合的コンヴァンシオンによってではなく，パーソナルな便宜により導かれるような) 親密な行為の中で実現される。例えば，開くのに困難な古い引き出しや，スタートさせるにやっかいな使い古したパソコンは，標準的な使用方法 (工業的格付) に従って機能させようとする人にとっては不便をもたらすが，これになじんだ人にはそうではない (Thévenot, 1990)。ある場所の住民は，通りすがりの人とは異なった目印ないし焦点を持っているのであり，彼らは周りのモノに対して，特異なる，パーソナルな目印を付託しているのである。つまりなじみのある世界は，人と，周囲環境のモノとの間での接続により織りなされているのである。そこでは事物はパーソナルであり，事物の使い勝手と事物に付託されている目印は住民にとって親しみのあるものであり，使用者にとって慣用となっているのである (Doidy, 2006)。行為遂行能力は，事物に働きかける主体から生じるのではなく，使用者とその環境との間に分散されているのである。こうした分散は，(使用者が徐々にモノになじんでくる中で) 親密な手探り状態から生じるのである (Thévenot, 1994)。

このような親密性のコミットメント・レジームは，親密な行為が一般性を主張するのでない以上，正当化のレジームとは異なる。他方で，こうした行為は，意図を持つエージェントと，(その機能性の観点から捉えられる) 事物とを分離している「プラン」によって導かれるのでない以上，「通常の行為」のレジームとも異なる (Thévenot, 1998)。通常の行為のレジームは日常言語によりうまく説明できる (主体と対象，意図，したがって責任からなる) が，親密性のレジームは言語による一般化は困難である。親密性のレジームはパーソナルで，ローカル化された接続を通じてインデックス化されており，背景から切り離すことはできず，一般性の

形態にアクセスすることもできない[3)]。

3) 正当化可能な行為のレジーム

このレジームはボルタンスキとテヴノにより詳細に解明されている（Boltanski, Thevenot, 1991及びボルタンスキ，2007の訳者解説を参照）ので，ここでは手短に指摘するに留めよう。彼等は，共通善ないし共通の上位原則（パフォーマンスや有名性，公益，伝統といった）の定義に照らして，論争（ディスピュート）において動員されるレジームを説明しようとし，その際に事物の持つ客観性が，アクターたちの主張が依拠すべき正当化をテストすることができることを明らかにしたのである。

パブリック・アリーナでの論争においては，当該のアクターたちは，他者により受け容れ可能な議論を構築しようとし，当該の状況が「公正ではない」という自らの主張を正当化しようとする（Doidy, 2006）。こうした論争は，公共空間の中に持ち込まれるのであり，つまり，それは，公衆の潜在的な評価に曝されることになる。それが正統であるためには，議論は一般性の形態をとらなければならず，アクターたちは「距離をおいたコミットメント」を遵守して，自分のためにのみではなく，直接の状況を超えた共通善の形態に訴えなければならない（「一般性への上昇」）。例えば，新幹線の建設に反対する住民（「近接」に暮らしている人々）は，「自分の」畑にそれが建設されることに反対するのではなく，まず，自らの主張が公益を参照していることを示すべく，一般性にまで上昇しなければならない。その際，予め格付けされた事物が証拠として提示され，これに基づいて，アクターの提示する正当化がテストされることになる。こうしてこのレジームにおいて事物は，ディスピュートの際の証拠をなすのである。

4. 市場的媒介装置

(1) デザイン：事物への社会の翻訳

上述では，身体的知覚の考慮が，ミクロ・マクロ・ループを探求する社会理論に重大な貢献をなすことを指摘した。もちろん事物と身体的知覚との直の接触は「真空管」の中で行われているわけではない。事実，デザイナーたちは，ある技術的事物が使用される社会的状況や社会規範などをその事物に埋め込み，こう言って良ければ需要や「社会的なこと」をこの事物の中

3) しかし Doidy (2006) が示すように，親密性は政治と無縁なのではなく，近接性や親密性を包摂する「ローカル」という観念が政治的正統性を獲得したのである。近年の参加型民主主義の展開に見られるように，近接性の政治は，公権力が住民や使用者の参加を提案しているような手続きとともに展開してきた。使用者や住民は，彼等がなじんだ使用により環境や事物を理解しているという点で，エンジニアや計画者とは異なる。こうした参加型装置の中に住民や使用者を関与させようとすることは，彼らのコンピテンスや「近接性の知識」の中に専門知があることを示すだけでなく，共通善が近接性へのコミットメントというローカルな形態から構築されることができることを示すことなのである。近接性の関係は，NIMBY のような地域エゴに陥ることなく，どのように「一般性へと上昇する」のか。こうした興味深い課題の検討については別稿を俟たなければならない。

に翻訳しているのである。まさに，このような意味においてこそ，事物と身体的知覚との直接的接触が「ミクロ・マクロ・ループ」の一環をなしていると言うことができるのである。

このような意味でデザインは，こうしたループを解明するための格好の事例をなしている(Dubuisson, Hennion, 1996)。こうした研究は Akrich たちの「使用の社会学」アプローチの潮流に属している。事物の使用者が，事物の形を重視するのかそれとも機能性をか，はたまた使い心地をか，象徴的意味作用を重視するのかに応じて，使用者イメージの構築様式は多様であり，多数の分岐したデザインをもたらすことになる（Dubuisson, Hennion, 1996, p. 2)。デザイナーの仕事とは，使用者との関係に入り込む事物について構想する作業であり，使用者と事物とを対称的に考慮する。使用者イメージの構築作業に対応して，事物（もしくはサービスないしデバイス）イメージの構築作業があり，この作業はそれ自体独立しては定義されず，関係的に，状況において定義される。デザイナーたちが使用についての実践的な社会学を行っているとすれば，それは次のような意味においてである。つまり事物をいかに格付けするのか，また使用者についての自らの見方をいかに翻訳するのかに，こうした実践が見られるのである。こうして製造過程に使用者の表象＝イメージを統合することは，需要を翻訳することなのである。こうしたアプローチは，当該の事物への使用者のコミットメントを通じて，彼等を機能的使用者としてのみならず，愛好家として，嗜好や欲望の主体として豊富化することを目指しており，それは事物とその使用との間の対称的な相互規定を，多様なコミットメントレジームに応じて差異化させるのである。

(2) 市場における格付け装置

上では，事物との身体的接触が「手がかり」を通じて共通表象へといたるメカニズムを解明すると同時に，こうした事物を把握，ないし格付けし，相互行為を調整するいくつかの差異化されたレジームについて検討してきた。以下では，事物や事物の格付け装置が，製品と消費者とを突き合わせ，いかに市場を構築するかを検討してみたい。

Escala (2006) が指摘するように，社会技術的ネットワークの社会学は，二つの格付けの契機を指摘している。まず，「市場」において消費者と製品とを突き合わせる契機がある。また，こうした契機の上流の各段階では，製品を特徴付け，テストし，販売を組織化するために多くのアクターが関与し，それぞれが製品に品質を付与し，格付けするように動員されている。こうした二つの契機のそれぞれの段階において，アクターたちによる品質の格付けを支えるために，製品テストや分類，測定道具が装備されているのである。

Dubuisson-Quellier (2003) は，製品が市場で流通できるように，製品の品質についてのアクター間での合意形成を産出させるオペレーションを，「格付け装置 dispositifs de qualification」と呼んだ。こうした格付け装置は総じて，製品とならんで消費者の肖像 figures (Cochoy) を対称的に客観化し，定義することを任務としている。例えば食品分野では消費者の肖像を客観

化する格付装置として，消費者パネルによる分析が消費者の姿を客観化させる主要なデバイスであり，食品消費の観点から消費者を格付けする。つまり年齢や性，職業，購入品目，量といった客観的データから消費習慣や食品選好を通じて，消費者の像を格付けする。

他方，事物としての食品を格付けする主たるデバイスとしては官能分析試験がある。とりわけ食品は，味覚や嗅覚といった身体感覚を通じて，消費者の特異なる選好が表明される特殊な部門なのである。食品の特徴は原料の生きた性格に由来し，単に物理的側面からのみ客観化され，計測されるだけでなく，官能的，化学的，微生物学的な補足的計測が要求されることになる。官能分析は，客観化された特徴（外観や色，手触り，匂い，風味，組成テキスチャー，温度など）の観点から，製品を微細に記述するために，人間身体（道具化され訓練された）をデバイスとして使用する。

こうした，需要と供給の双方から構築された「市場の標準」が，製品の標準的味覚と消費者の選好とについて定義し，食品企業に対しての意思決定の判断を装備させるのである。

ところで，市場とは特異な流通空間なのであり，CSI の翻訳の社会学が記述するネットワークとは異なり，製品の定義に必要なすべてのアクター（ヒューマン，ノンヒューマン）の動員が完成するや，この製品が安定化するわけではない。というのも，こうした動員は常に暫定的で，絶えず解体されるからである。他方，消費者の肖像はいったん構築されるや，そのままなのではない。新製品の開発という事物の再格付が，消費者像の再定義，再格付けを通じて，消費者を再び獲得させるのであり，決定的に，最終的に消費者を永久に繋ぎ止めることは不可能なのである。生産及び市場のアクター全体が，製品と消費者との間の突き合わせを絶えず解体し，再構築させる以上，永久的に消費者を捕捉するというのは不可能な幻想である。消費者の肖像と事物とを絶えず新たに格付けするデバイス，かくして消費者を捕捉し，繋ぎ止めるデバイスこそが市場的格付装置なのである。

(3) 消費者の捕捉装置

消費者のモビリティが市場の特徴なのであり（Cochoy，2002），このモビリティないし流動性が，純粋完全競争という幻想の土台にある。こうした競争は，経済アクターたちが，市場への参入と退出の自由を保持していることを前提としている。こうした市場においては，一方に供給のプロがおり，他方にはアマチュアの消費者がいる。消費者は，一つの供給業者や売り場から別のそれへと移動し，また市場から退出して，市民的領域から市場を批判したりするし，他方，供給のプロたちは移り気な消費者を家内的領域に取り込むことで，あるいは工業的規格を通じて彼等を自らの下に留めようとする。この場合，プロは，クライアントとの関係を「パーソナル化」したり，規格化することで，市場につきものの匿名性や揺らぎを克服しようとするのである。

消費者の肖像 figure の構築は，生産関係において占める位置によってではなく，「消費スタ

イル」への連結によって，社会的主体を定義する。こうして社会的なことをカテゴリー化するために，絶えず市場が動員されることになる。つまり生物学的特性（性や年齢）や生産的特性（学歴資格や職業カテゴリー，所得など）による帰属によってではなく，人々は，市場が提案する可動的なデバイス（ブランドやクライアントセグメント，利用者グループなど）への帰属によって定義されるのである。

上述のように，市場という特異なる流通空間において，消費者を永久的に，製品に接続させておくことは不可能である。こうした不可能を実現させようとして，例えば航空会社は「マイレージ」といったような新たなデバイスを作り上げることになる。こうした消費者，総じて公衆を捉えるデバイスについて，Cochoy（2004）は，『赤ずきんちゃん』の中で，オオカミが行う様々な「捕捉 captation」のオペレーションを例に説明している。つまりこうした捕捉のデバイス dispositifs は，人々の軌跡を迂回させ，彼らを外の空間から遮断し，彼らをコントロールの下に置くために，消費者自身が持っている性向 dispositions や感情を活用するのである。このように考えると，捕捉とは，アクターネットワークの論者の言うような「利害付け intéressement」というよりは，むしろ「魅了」に近いであろう。というのも，このタームは，合理的な利害付けの形態を超えて情動的で象徴的，文化的な手段を示し，「道からそらせること」，「迂回させること」を強調するからである。

こうした Cochoy による捕捉デバイスの研究は，一方では，主体に身体化されたルーティンとしての性向（ブルデュー）と，他方では事物に支えられデバイスとなったルーティンとを接続しようとする。しかし「利害と習慣＝ハビトゥスというワクチンが情熱というウィルスを駆逐する」（Cochoy，2004）どころか，こうしたワクチンはますます効果を失っているのである。むしろ市場的デバイスは，新しいクライアントを捕捉するべく，習慣や事物への接続から彼らを根こぎさせる。他方で，同じデバイスが，一端捕捉されたクライアントを忠実化させ，自らのもとに押しとどめるべく，習慣を動員する。こうした根こそぎと根付きという矛盾した作用を行使する際に動員されるのが，利害計算と習慣という二つのワクチンが抑圧していた情熱や感情なのである。

さらに近年では，例えば倫理的金融商品や「企業の社会的責任 CSR」の議論に見られるように，経済のゲームの中に利害計算とは全く異なった性向（社会的公正や倫理，環境）を統合するための市場デバイスが展開しているのが見られるのである。こうしたデバイスこそが感情や性向の複数性と，それに由来する人々の多能性を覚醒させることができるのである[4]。

---

4) 上述の図において，我々は感情と性向を図示しておいた。また上では，センサーとしての身体が非意図的に事物をキャッチすることができるとした。しかし，このことは，身体が事物を把握する際に感情や性向が必然的に関与することを否定するものではない。こうした感情や性向を含んだコミットメントレジームの解明は，実験心理学などの新たな道具立てを必要とすることになろう。

5. おわりに

本稿は「純粋市場論理の不完全性」を指摘し，市場での消費者と事物，需要と供給の突き合わせを可能とするためには，「目印」ないし焦点が必要であることを論じた。こうした目印こそが事物を客観化し，格付けし，かくしてこの事物を市場空間で流通させることで，市場的アクターの間でのコーディネーションを可能とするのである。本稿を締め括るにあたり，ここでの議論をふまえて若干の実践的問題提起を行いたい。現在，市場経済のグローバル化がその頂点に達しているかのようである。価格のみを目印にして世界の隅々から原料や製品が調達されるようになっている。しかし「もはや経済が一流とは言えない」（大田経済相）日本が，新興国の台頭の下，今後も国際市場でこれらの財に高値をつけ続けることができるかどうか，危ぶまれるような事態が様々な場面で起こっている。事物との親密な接触や近接性といった，グローバル市場では調達し得ない資源（「匠のワザ」や地場産品への嗜好など）を組み込んだ市場的媒介装置をどのように構築することができるのであろうか。本稿での議論は，こうしたアクチュアルな制度設計の問題を考察する上での，一つの理論的枠組みを提示しようとしたのである。

参考文献

Barbier, R. and Trepos, J.-Y. (2007) "Humains et non-humains: un bilan d'étape de la sociologie des collectifs", *Revue d'anthropologie des connaissances*, no. 1, pp. 35-58.

Barrey, S. (2006) "L'épreuve des Collections dans la mise en marché des produits alimentaires", *Reseaux*, no. 135-136, pp. 193-216.

Bessy, C. (2003) "L'organisation des ventes publiques. Perception, qualification et espaces de circulation des objets", in Stanziani, A. (ed) *La qualité ds produits en France*, Belin, pp. 177-194.

Bessy, C. and Chateauraynaud, F. (1995) *Experts et Faussaires*, Metailie.

Beuscart, J.-S. and Peerbaye, A. (2006) "Histoires de dispositifs", *Terrains & Travaux*, no. 11.

ボルタンスキ，L. (2007) 「事件・警戒・破局」，山口編著『科学技術をめぐる言説論的アプローチの展望：ナノテクノロジーを事例に』，国際基督教大学，モノグラフシリーズ，第12号。

Callon, M. (2006) "What does it mean to say that economics is performative?", *CSI Working Papers Series*, no. 5.

シャトーレイノ，F. (2007) 「議論の制約：討議枠組みと政治との間での議論形態」，山口編著『同上』。

Chateauraynaud, F. (2004a) "Invention argumentative et débat public", *Chahiers d'économie politique*, no. 47.

Chateauraynaud, F. (2004b) "L'epreuve du tangible", in Karsenti, B. (ed) *La Croyance et l'Enquête*, Ed. EHESS.

Cochoy, F. (2004) " La capitation des publics. Entre dispositifs et dispositions, ou le petit chaperon rouge revisité", Cochoy, F. *La Captation des Publics*, Presses universitaires du Mirail, pp. 11-68.

Cochoy, F. (2002) "Figures du client, leçons du marché", Sciences de la Société, no. 56, pp. 3-23

Conein, B., Dodier, N. Thévenot, L. (1993) Les Objets dans l'Action, *Raisons Pratiques*, no. 4.

Doidy, E. (2006) "Les régimes de la proximité dans des économies de la grandeur"

Dubuisson-Quellier, S. (2003) "Goûts des produits et des consommateurs. La pluralité des epreuves de qualification dans la mise en marché des produits alimentaires", Dubuisson-Quellier, S., Neuville J.-P., *Juger pour echanger*, Ed. Maison des Sciences de l'homme, pp. 47-74.

Dubuisson, S. and Hennion, A. (1996) *Le Design: L'Objet dans l'usage*, Les Presses de l'Ecole des Mines.

Latour, B. (1996) "Ces reseaux que la raison ignore: laboratoires, bibliotheques, collections", Baratin, M., Jacob, C. (ed) *Le pouvoir des bibliotheques*, Albin Michel, pp. 23-46. ラトゥール「理性の知らないネットワーク」田村真理訳，岡田他編著『科学を考える』，北大路書房

Latour, B. (1994) "Une sociologie sans objet? Remarques sur l'interobjectivité", *Sociologie du travail*, no. 4.

Lebaron, F. (2003) "L'internationalisation du champ de la science économique et la construction d'un nouvel ordre mondial: Declin ou persistence des particularités nationals?", in Convert, B. (ed) *Repenser le marché*, L'Harmatttan, pp. 251-266.

Lordon, F. (2007) "Le prix Nobel, l'économie politique et la mondialisation", *L'Economie politique*, no. 35.

Nachi, M. (2007) *Introduction à la sociologie pragmatique*, Armand Colin.

須田文明 (2008) 「実験室の中の社会，社会に埋め込まれた実験室：フランスのナノテククラスターの展開と『ハイブリッド・フォーラム』の展望」，『科学技術社会論研究』，第6巻。

須田文明 (2004) 「知識を通じた市場の構築と信頼：コンヴァンシオン経済学及びアクターネットワーク理論の展開から」，『進化経済学論集』第8集，pp. 209-218。www.s.fpu.ac.jp/hattori/papers/suda.doc

Thévenot, L. (2006) *L'Action au pluriel*, La Decouverte.

Thévenot,L. (1994) "Le régime de familiarité. Des choses en personne", *Geneses* no. 17, pp. 72-101.